



虫売るむら

虫を特産品とした集落

大門 哲 (Satoru DAIMON 石川県立歴史博物館)

鳴

虫の声を愛でる虫聞きと呼ぶ娯楽がある。いまでは簡単にベクトシヨップなどで虫を手でできるが、かつては行商人が売り歩いた。では、どのような人々が商売にいそしんだのだろうか。

北陸の古都・金沢では北郊の神谷内地区が虫売りのむらとして知られた。活動ぶりが確認できるのは明治後期から。昭和初期の記録によれば、戸数93、

そのうち行商に出歩いたのは50軒。残り、虫の捕獲を手伝った。

販売した虫はスズムシとマツムシが中心で、ほかにクツワムシを少々。採取場所は、当初は後背地の里山だったが、1898年(明治31)に鉄道が開通し、マツムシの産地といわれた能登の海岸砂丘地にまで足をのばすようになった。

販売開始は8月下旬から。天秤棒に

角籠を一つずつ吊り下げ、「まつむつしゃーい、すずむしゃあい」と声を響かせ歩いた。1932年(昭和7)の値段は、マツムシが15銭、スズムシ12銭、虫籠20銭。クツワムシは販売用というよりは、客の注意をひかせるための「おとり役」だった。

行商の範囲は、西は京都、東は富山、南は高山まで。県内外とも、得意先となったのは、料亭や富裕な商家だった。料亭では、庭に放したり、高価な虫籠とセットで買って客室においたりした。

金沢でとくに売れたのは御茶屋。芸妓が客に「あの虫やかわいい鳴き方しとるね」と、ねだってくれたためである。収益は、1932年時で、金沢市内を1日まわり20円、県外出張だと一回で70円だった。商売の終焉は1965年(昭和40)ごろで、虫がいなくなっ

たことが最大の原因だった。

神谷内が虫を専売できたのは、なによりも商品の仕入れという点で他集落より優位にあったからである。第一に虫。金沢の北郊に位置し、さらに駅が近くにあるため、鳴虫の産地である能登へのアクセスに便利であった。第二に虫籠。金沢で竹細工屋が集中したのは春日町だったが、同町は神谷内と近接していた。

ただし、商品を仕入れやすいといっても、そもそも商売への意欲がわかなければ、集落あげての体制にまで発展することはなかったであろう。当該地区が高い意欲をもったのは、近郊集落の多くが、都市の多様な欲望に応じ、やわらかな生業戦略を展開してきた歴史的背景があったからにはかならない。神谷内が都市に運んだのは、地主の収益となる薪炭や蔬菜類(そさい)だけではない。土地をもたない住人は薬草・茸・積雪などのオープン資源が重要な商品となった。虫は、近郊集落が生み出した多様な商品のあくまでひとつなのである。

参考文献

大門哲、2009年「虫売るむら―金沢の虫聞き文化」『民具研究』140 日本民具学会。



写真1 虫を売る男児
手元に虫籠をもつ。大正14年8月22日「北國新聞」

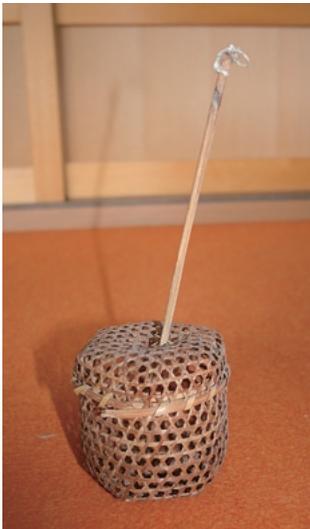


写真2 金沢の虫籠
籠高さ9cm。最勝寺蔵